

【担当学芸員】栖鳳は弟子入りした光瑠に、自分の真似をするのではなく、光瑠が学んできた琳派という特色を伸ばすような指導をしました。さすが栖鳳です！

石崎光瑠

いしざきこうよう

1884/04/11
-1947/03/25



本名
猪四一

出身地
富山県砺波郡福光町
(現南砺市)

実家
豪商
(父は実業家で文人)

家族構成
五男

師匠
山本光一、竹内栖鳳

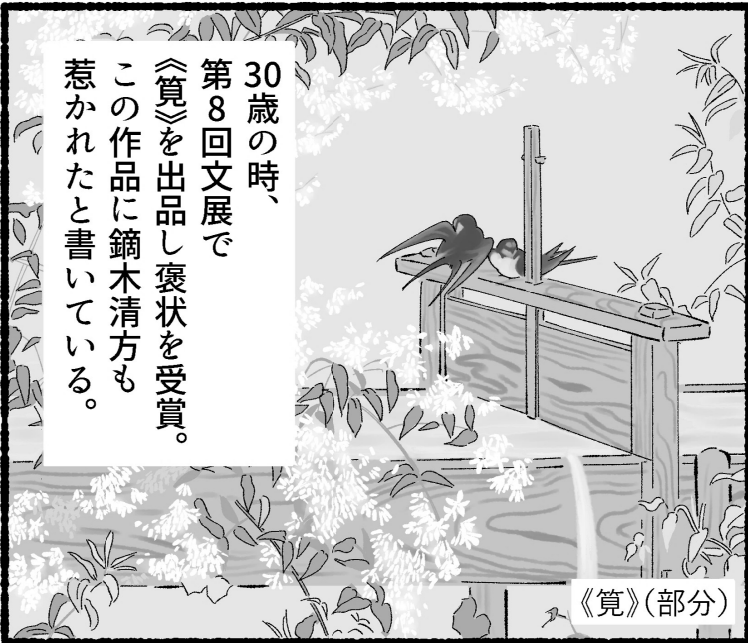
好きな食べ物
干し柿

22歳の頃から
本格的な登山を始めた光瑠。

草花や山容を写生したり、
写真を撮ったりしたという。



30歳の時、
第8回文展で
《寛》を出品し褒状を受賞。
この作品に鏝木清方も
惹かれたと書いている。

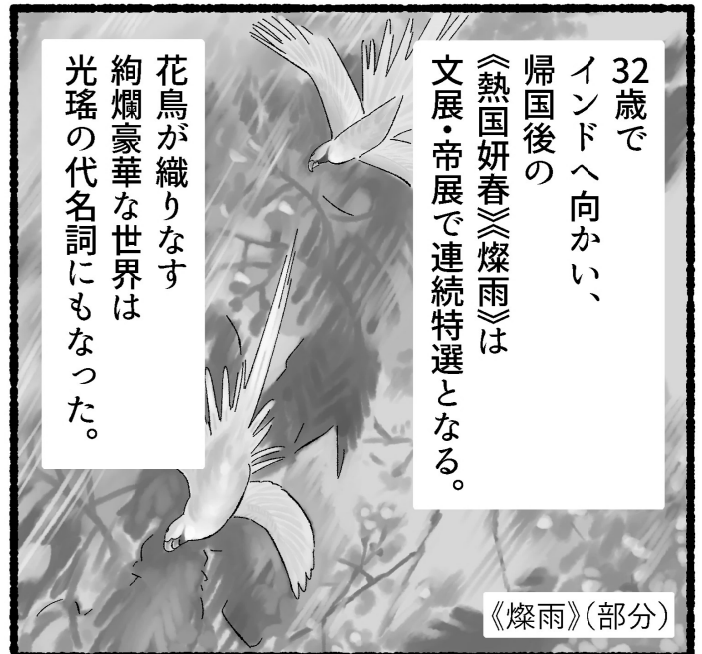


《寛》(部分)

32歳で
インドへ向かい、
帰国後の

《熱国妍春》《燦雨》は
文展・帝展で連続特選となる。

花鳥が織りなす
絢爛豪華な世界は
光瑠の代名詞にもなった。



《燦雨》(部分)

昭和に入り、
上品で重厚な大作
《寂光》が生まれる。

光瑠は
夢の様な美しい世界を
追い求めたのだった。



参考文献：石崎光瑠「西福寺の若冲襖絵—新発見の画蹟を観て」『中央美術』12巻5号、1926年5月
石崎光瑠「土田麦僊君の苦学時代」『塔影』12巻7号、1936年7月
黒田重太郎「光瑠君と私」『美之國』13巻7号、1937年7月

